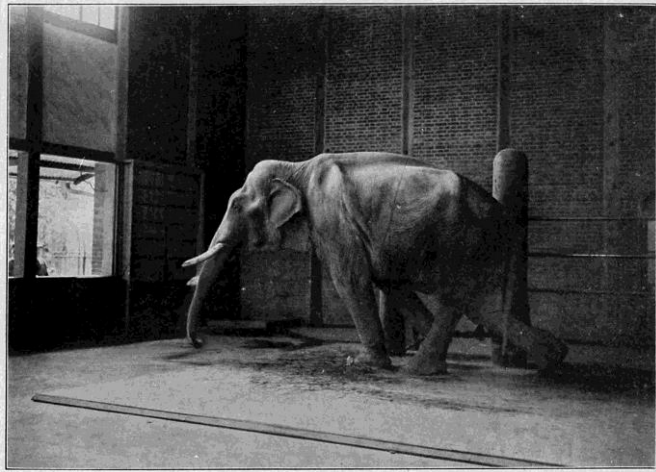


こんにちは。歴史資料室の鈴木です。

7月17日配信の「あおり歴史トリビア」第415号で、昭和25年（1930）に上野動物園が行った移動動物園が青森市を訪れ、子どもたちがゾウを見たお話をしましたね。

でも、実はもっと以前の青森市の子どもたちにも、ゾウやライオンなどの動物を見る機会がありました。それは、明治時代末から全国を巡回した民間の移動動物園です。



上野動物園のゾウ
（『東京風景』小川一真出版部、1911年、
国立国会図書館デジタルコレクション）



上野動物園のライオン
（渡辺銀太郎『動物写真画帖 野獣之巻』新橋堂、
1911年、国立国会図書館デジタルコレクション）

移動動物園に関する記事を、明治時代末から大正時代中頃までの『東奥日報』から探してみたところ、この間に少なくとも6回、青森市を訪れた記録がありました。それは、明治41年（1908）の万国動物大会、明治42年および大正2年（1913）と同7年にも訪れた矢野動物園、明治45年の帝国巡回動物園、大正4年のルナパーク出張動物園です。

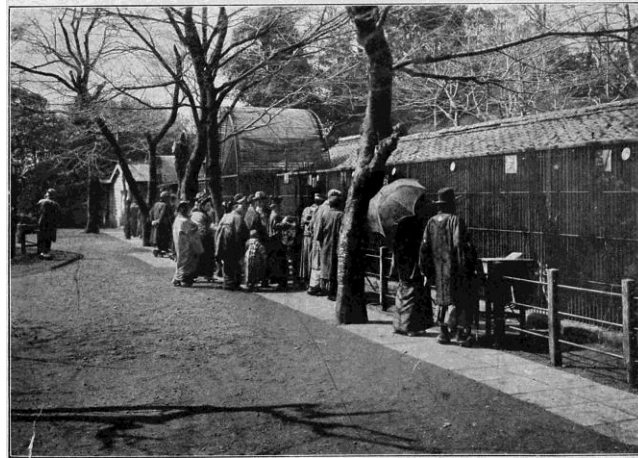
今回は、この中から明治45年の7月5日から11日まで、青森市で興行した帝国巡回動物園についてご紹介したいと思います。

塩町（現青柳2丁目）に設けられた会場の入口には、たくさんの提灯と万国旗が吊るされ、客寄せのため一段高いところに10匹ほどのニホンザルが繋がっていました。

場内は9室に分けられ、ゾウ・ラクダ・ワニ・トラ・ヒョウ・クマ・大蛇といった大型動物のほか、ダチョウ・ヒクイドリ・クジャクといった鳥類、外国のシカやヒツジ、オオカミなどが観覧できました。なかでも、呼び物は野生下では1920年代に絶滅したとされるバーバリライオンで、その唸り声が地に響いて気味が悪いと記事は伝えています。

この移動動物園は狭い空間に多くの動物を展示し、またトラやクマの曲芸、ゾウの碁盤乗りを披露するなど、江戸時代の動物見世物やサーカスに近い娯楽的なものだったと思われます。

ただ、当時はまだ常設の近代的な動物園は東京と京都にしかなく、そこを訪れることができる青森の子どもは稀だったろうと思います。ですから、こうした移動動物園は子どもたちが本物の動物を見られる貴重な機会でした。また、移動動物園側も教育の参考になると宣伝し、学校に対しては入場料の団体割引も行っていました。



上野動物園
(『東京風景』小川一真出版部、1911年、
国立国会図書館デジタルコレクション)

そのため、市内の小学校のみならず、東津軽郡の奥内村や野内村など市外の小学生たちも先生に引率されて遠くからやって来ました。さらに青森中学校や高等女学校、師範学校、裁縫学校なども団体で見学に訪れ、最初の4日間だけで約9,000人もの児童生徒が見学しています。

やがて興行を終えた帝国巡回動物園は、ライオンやトラなどは荷馬車に乗せ、ゾウやラクダは歩かせて、次の会場である五所川原町に移動していきました。青森の道路をゾウやラクダが歩いている光景を想像すると不思議な気がしますね。